**長部日出雄（おさべ・ひでお）☆常設展示作家**

**１、長部日出雄の生涯**

**＜生涯１　念願の新聞記者へ、そして帰郷＞ ０歳～36歳 1934～1970**

小学校に入る前から多くの本を読み、毎日のように映画を観、学校の成績も全教科抜群の＜早熟＞少年であった。新聞記者になるという将来の職業をかなり前から決めていた。小説は中学の時初めて書いた。学校新聞に小説、ルポの類を発表、高校一年で早くも県下学校新聞コンクールで優勝、その才能が高く評価された。

早稲田大学を卒業直前に中退し、読売新聞社へ入社。「週刊読売」の記者としてトップ記事を連発、映画欄も担当していた。

 しかし、退社後フリーのルポライターなどマスコミ世界で仕事を続けたが、酒に溺れる日が続いた。自己喪失の危機を打開するため帰郷を決意したのは昭和45年であった。

**＜生涯２　自己再生の願いと作家への道＞ 36歳～39歳 1970～1972**

当時「小説現代」の編集長だった大学の先輩大村彦次郎から小説を書くことを勧められ、処女作「あゝ断餌鬼」を発表。作家を目指して、また自己再生を願って帰郷、２年４ヵ月滞在した。

津軽の各地を取材し、そこに津軽の精神風土の源流をみる。それは自己の再発見でもあった。津軽は＜未知の国＞であったという。10本の小説を「別冊小説現代」などに発表、そのうち津軽に取材した６本をまとめた第一創作集『津軽世去れ節』を地元の津軽書房から昭和47年上梓、翌48年所収作品「津軽じょんから節」「津軽世去れ節」で第69回直木賞を受賞した。作家への道を歩みだし、47年５月再上京する。

**＜生涯３　津軽の風土を追い求めて＞　40歳～48歳 1973～1982**

上京後本格的な作家活動を開始した。49年には津軽の近世を描いた『津軽風雲録』、50年には近年の発掘調査で注目された安東氏の栄枯盛衰を、現代と時間交錯させた『消えた城塞』、51年には五所川原の豪商佐々木嘉太郎、明治の名工堀江佐吉の生涯と出会いを活写した『風雪平野』を刊行。

さらに、52年からは「週刊文春」に２年間にわたって連載した、超大作『鬼が来た　棟方志功伝』を発表、55年にこの作品で芸術選奨文部大臣賞を受賞した。長部は「この作品で長編作家としての自信を得た」と語っている。津軽の風土を見詰めながら、過去から現在に生きた津軽人の生きざまを見事に表現している。

**＜生涯４　映画監督と「夢の祭り」＞ 49歳～55歳 1983～1989**

幼少の頃から観続けてきた映画は6000本を超えるという。長部は作家のほかに映画評論家の＜看板＞も持っている。「週刊読売」の記者のとき、大島渚ら新人監督に「ヌーベルバーグ」と命名したのも長部であった。

「週刊朝日」の映画欄を１年間担当したり、「オール讀物」には56年から休載をはさみながら映画評「紙ヒコーキ通信」を連載した。

63年７月８日、長年の夢であった映画監督として初メガホンをとった。原作・脚本・監督を担当した映画「夢の祭り」である。津軽三味線に男のロマンをかけた物語。カナダのモントリオール国際映画祭「今日と明日の映画」部門でも好評を受けた。

**＜生涯５　作家活動の充実＞ 56歳～84歳 1990～2018**

57年の『見知らぬ戦場』で第６回新田次郎賞を受賞してその実力が証明され、作家としての地歩を固め、話題作を次々と発表した。平成２年には「まだ見ぬ故郷」を毎日新聞に連載、３年には「海燕」に「風の誕生」を連載した。また、平成14年の『桜桃とキリスト　もう一つの太宰治伝』で第29回大佛次郎賞、第15回和辻哲郎文化賞一般部門をダブル受賞した。

ほかにも、映画を題材にした『林檎キッドよ永遠に』や短編小説集『愉快な撮影隊』エッセイ集『振り子通信』『精神の柔軟体操』などがある。

作家活動以外に、日本ペンクラブ理事や新田次郎賞、柴田錬三郎賞、山本周五郎賞の選考委員、毎日映画コンクール、文芸家協会編纂の中間小説代表作選の選考委員、大学や日本映画学校の講師などの仕事に活躍した。

2018（平成30）年10月18日、虚血性心不全のため自宅にて死去。

**２、長部日出雄の代表作**

**〇『津軽世去れ節』**

『津軽世去れ節』（昭和47年11月30日 津軽書房刊）は長部が45年１月末に帰郷し、２年４ヵ月滞在したその期間中に発表した10本の短編小説のうち、津軽に取材した６本を所収した第一創作集である。

「死者からのクイズ」（「週刊小説」1972年７月28日号）「津軽じょんから節」（「別冊小説現代」1970年新秋号）「津軽世去れ節」（「別冊小説現代」1971年陽春号）「津軽十三蜆唄」（「別冊小説現代」1971年新春号）「猫と泥鰌」（「別冊小説現代」1971年新秋号）「雪のなかの声」（「別冊文藝春秋」1972年新春号）の６本である。

そのうち「津軽じょんから節」「津軽世去れ節」の２本が48年に第69回直木賞を受賞した。「津軽世去れ節」は戦前の津軽を舞台に活躍した、不世出の天才民謡歌手「嘉瀬の桃」の生涯を太宰治、葛西善蔵とオーバーラップさせながら描出した視点が高く評価された。一連の＜津軽物＞の代表作である。

**〇『鬼が来た 棟方志功伝』**

昭和48年、再上京し作家への道を歩み始めた長部を待っていたのは直木賞であった。力を得た長部は次から次へと作品を発表する。

52年、長部は大作に挑戦する。「週刊文春」に２年間連載した『鬼が来た　棟方志功伝』1800枚である。この時期ほとんどこの作品一本に絞ったという力作である。青森の貧乏鍛冶屋の子が「わだばゴッホになる」と誓い、二度も国際美術展でグランプリを受賞した秘密は何か。膨大な資料と調査を駆使して棟方芸術の核心に迫っていく。

雄大な構想と緻密な構成、輻輳する人物のあざやかな描写、棟方志功の人となりを伝える数々のエピソード、志功の内面世界への照射、「一つの＜交響楽＞をねらった小説だ」と長部はいう。棟方芸術の核心に「古代人の魂－文字の原義における鬼」を長部はみた。長部文学のターニングポイントとなった作品である。

**〇『見知らぬ戦場』**

昭和57年７月～翌年１月まで「別冊文藝春秋」に３回にわたって集中連載し、61年に文藝春秋から単行本として刊行された。

昭和20年７月26日、フィリピンのルソン島でマヨヤオにて戦死した長兄茂雄の最期の様子と戦争の悲劇を描いた400枚の長編小説である。

終戦を目前にして死んだ長兄は何を考えていたのか、都合４回にわたる現地調査と徹底した取材で最期の兄の思いに達する。

しかし、肉親に対する哀悼でこの小説は終わらない。長部の視点は現地住民に移動する。戦争の被害者は戦って死んだ兵士だけではない、容赦なく戦争の災禍に巻き込まれた多くの名もない住民もまた被害者なのだ、という思想に裏打ちされた作品構造になっているゆえに、重層的に戦争の悲劇を伝える。長部は、戦争を知らない若い人にぜひ読んで貰いたいという。

**〇『紙ヒコーキ通信３ 映画は夢の祭り』**

幼少の頃から観続けた映画の数は実に6000本を超えるという。長部は作家のほかに映画評論家の＜看板＞も持っている。

高校１年の時、「若草物語雑感」という映画評を早くも学校新聞に発表。「週刊読売」の記者時代には映画欄も担当していた。また、「週刊朝日」の映画欄も１年間担当する。56年から「オール讀物」に＜紙ヒコーキ通信＞を連載、途中発表形式に変化はあったが現在まで続いている。そのシリーズの単行本の３冊目が本書である。

映画をこよなく愛する長部はいう。「ぼくの考えでは、映画は夢の祭りなんです。監督もスタッフも俳優も、それぞれ自分の夢を抱いて、撮影という祭りに集まって来る。そして映画館の暗やみのなかに生まれるのも、観客の夢の祭りで」ある、と。

63年、念願かなって初メガホンをとる。映画のタイトルは－夢の祭り－。

**３、長部日出雄のキーワード**

**＜キーワード１　津軽三味線＞**

昭和37年２月、心に屈折した思いを持ちながら新聞記者を務めていたからであろうか、「三橋美智也ショー」を観ていた時、木田林松栄の津軽三味線を聞き衝撃を受けた。なぜか。聴きなれた津軽三味線ではなかったのか。１ヶ月後に読売新聞社を退社。

マスコミ世界に身を投じて、連夜の酒に溺れかかっていた時、恐らく津軽三味線の音色が長部を撃っていたと思う。自己再生を願っての帰郷時、ノイローゼ状態に一時陥った長部を慰めたのは津軽三味線の音色であった。なぜか。津軽一円を取材しながらその問いを自らに課し、その秘密の核心に津軽の精神風土の源流をみた。

津軽三味線－イタコ－お山参詣－嘉瀬の桃－太宰治－葛西善蔵－棟方志功の制作方法の同一線上には何があるのか。

長部文学の基調をなす、この一本の補助線こそその秘密の鍵であろう。帰郷後の第一作目の「津軽じょんから節」の冒頭にあの衝撃の音色を再現している。

**＜キーワード２　あすなろ＞**

「あすなろ、という言葉が好きだった。いうまでもなく、ヒバの別名であって、あすなろ（翌檜）は、『明日はヒノキになろう』の意味だとされている。私はその言葉のなかに、自分の成長にかける少年の夢もしくは後進地帯の夢が秘められているように感じていた」

長部の再上京後のまもなくの発言であるが、その後もその思いはいささかも変わっていないどころか「あすなろ」こそが本県の特長とみている。

確かに本県は＜後進＞県であるかもしれない。しかしそれは＜青春期＞にあるからだとし、「青年期の特質に通じる気質を強く持っていたからこそ、佐藤紅緑、太宰治、石坂洋次郎は、日本中の少年少女、若者、若い女性を引きつけて、広く共感を呼ぶ作品を書けたのだとおもう」と、いっている。

あすなろ－それは郷土の精神構造の源流を最も象徴的に語っているかもしれない。

**＜キーワード３　夢の祭り＞**

昭和63年７月８日、映画「夢の祭り」が岩木山麓で撮影開始された。原作・脚本・監督を担当した長部の初メガホン。「ヨーイ！スタート！」

映画監督になりたい－。この夢を、おそらく少年時代から見続けてきたと思う。

夢の祭り－自分で撮る映画のタイトルはこれ以外にない、なぜなら「個人のものである夢と、集団のものである祝祭。その両者の共通性の上に立つのが映画である」からだと断言する。

主演の柴田恭兵は「役者に注文をつける監督が少なくなっていますが、長部さんはきちんと演技に注文をつけます。ゼッタイ撮りたかったという怨念が感じられます……」と述べている。

カナダのモントリオール国際映画祭の「今日と明日の映画」部門で好評を受ける。長部の人生における夢の祭りでもあった。

**４、長部日出雄のゆかりの場所**

**①帰郷のときの仮寓**

**向外瀬木伏333の１（現弘前市城西１丁目２の８）**

昭和45年１月末帰郷し仮寓したアパート。帰郷当時ノイローゼ状態で家賃を滞納したが、一度も催促されなかった。その恩義は死ぬまで忘れないと長部は語っている。ここを起点に津軽一円の取材に出る。「岩木山が見える２階の窓の下に机を据えて、毎日、小説を書くのだと、僕は殊勝なおもいで胸を踊らせていた。」

**②勇気の源泉**

**岩木山（青森県弘前市）**

朝な夕なに岩木山を見て育つ。弘前に帰ったときは、たいてい百沢か嶽に行き、山の景色を見ながら、ビールを飲むという。

「津軽の文化や、津軽人の精神構造の底には、かなり大きな要素として、岩木山信仰がひそんでいるとおもう」とも語る。映画監督で初メガホンをとったのも岩木山麓であった。

**③帰郷時の取材地**

**七里長浜（西津軽郡・北津軽海岸一帯）**

昭和45年から２年４ヶ月間の帰郷時に津軽一円を取材した。その一つに十三湖がある。後に『消えた城塞』に結実する。そのころの心境を語る。「右を見ても左を見ても、人っ子ひとりいない津軽半島の日本海に面した七里長浜で、流木に腰を下ろして冷たい握り飯を食べた時の心細さは、いまでも忘れない。」

**④戦死した兄の最期の地**

**マヨヤオ（フィリピン・ルソン島）**

終戦直前に戦死した長兄茂雄の最期の様子を知りたい、と思っていた長部は都合４回現地を訪れている。『見知らぬ戦場』『戦場で死んだ兄をたずねて』の２冊の単行本のほか、エッセイ集にもその時の取材状況が報告されている。外国はアジア５ヶ国の他旧ソ連、アメリカ、ドイツ、フランス、カナダなどを訪れている。

**５、長部日出雄の関連人物**

**☆太宰治（だざい・おさむ）：文学の師**

昭和23年６月、太宰の入水心中事件で長部は初めてその名を知った。当時中学２年で、恩師から「日本で一番えらい作家だ」と聞かされ、読んだ作品が「お伽草紙」であった。その「文章と語り口の面白さに魂を奪われ」てしまった。以来長く太宰を読み続けていたという。

57年に『神話世界の太宰治』（平凡社刊）を上梓し、太宰論を展開したほか、多くの論文を発表している。なぜ太宰なのか。

「かのエディプス王を恐るべき真相に導いたデルポイの碑銘『汝みずからを知れ』にこたえるためであるといってもよい、長いあいだ太宰に惹かれてきた自分の総体（＝アイデンティティ）をぼくは知りたいのである。」

**☆石坂洋次郎（いしざか・ようじろう）：郷土の先人**

昭和22年、「青い山脈」が「朝日新聞」に連載されたとき、長部は毎日、新聞を読みながら、「青い山脈」は弘前の町の話だと思ったという。郷土の大先輩で、同窓の先輩でもある石坂洋次郎を強く意識していたことは容易に想像がつく。「青い山脈」の映画の成功はさらにその気持ちを深めた。

石坂文学を戦前から戦後に一貫するリベラリズムの思想に裏打ちされた文学と位置づけて「日本人全体の精神史、思想史の観点に立てば、どんな作家にも引けをとらない影響力を発揮した巨大な存在である」と評価している。

長部が直木賞を受賞したときの選考委員のひとりが石坂洋次郎であった。

**☆大村彦次郎（おおむら・ひこじろう）：“産みの親”**

早稲田大学に在学中、校友会の機関誌「早稲田学報」の編集助手のアルバイトをしていたとき、２人の先輩に出会った。

１人がのちに芥川賞を受賞した高井有一で、長部に「太宰治論」を書くことを勧めた。もう１人が大村彦次郎である。昭和44年、「小説現代」の編集長になった大村彦次郎が「マスコミの底辺で酒に溺れ、溺死しかけていたぼくを見かねたのか、小説を書かないか」と勧め、書き上げた処女作が「あゝ断餌鬼」であった。編集部に原稿を届け、その採用を心配していたとき、「あれ、いけますよ」の大村彦次郎の電話の声を聞いたときの嬉しさはいまでも忘れられないと述べている。

**☆高橋彰一（たかはし・しょういち）：“育ての親”**

昭和45年１月末の長部の帰郷の持つ意義は極めて大きい。46年頃、津軽書房の社主である高橋彰一に出会ったこともそのひとつであろう。２年４ヵ月の帰郷期間中に10本の小説を書き上げ、そのうちの６本をまとめた第一創作集「津軽世去れ節」を津軽書房から上梓、翌48年「津軽じょんから節」「津軽世去れ節」の所収作品で直木賞を受賞したのもその出会いがあったからだ。直木賞の発表当日、高橋は上京しその瞬間に立ち会った。

以後、小説集、エッセイ集、＜長部日出雄・津軽の本＞全６巻など津軽書房から出版されたが、その緊密な交際について長部は機会をとらえて筆を運ぶ。高橋に贈る言葉のやさしさに胸を打たれる。

**６、長部日出雄の資料紹介**

〇夢の祭り

書画（色紙）

1993（平成５）年

270mm×240mm

「津軽じょんから節」を原作として、長部自身監督をした映画「夢の祭り」と同

題の染筆。長部日出雄氏寄贈。

〇まだ見ぬ故郷

書画（色紙）

1993（平成５）年

270mm×240mm

キリシタン大名高山右近の活躍を描いた『まだ見ぬ故郷』（平成３年８月）と同題の染筆。長部日出雄氏寄贈。

〇「津軽世去れ節」

原稿

257mm×360mm（×２枚）

昭和48年に第69回直木賞を受賞した作品の一編「津軽世去れ節」の冒頭。戦前の津軽を舞台に民謡歌手「嘉瀬の桃」の生涯を描く。長部日出雄氏寄贈。

〇「まだ見ぬ故郷」

原稿

1990（平成２）年１月

270mm×190mm（×140枚）

 「毎日新聞」に平成２年１月から連載されたものの原稿。平成３年８月、『まだ

見ぬ故郷』刊行。主人公はキリシタン大名高山右近。長部日出雄氏寄贈。

**７、長部日出雄年譜**

1934（昭和９）年･･･９月３日弘前市土手町133番地に四男三女の末子として生ま

れる。本名も同じ。

1939（昭和14）年･･･この頃より店の女給さんに連れられ、毎日のように映画を観

る。

1950（昭和25）年･･･青森県立弘前高等学校入学。直ちに「弘高新聞」の編集部

へ入部。県下学校新聞コンクールに１年生で出場、優勝す

る。

1953（昭和28）年･･･早稲田大学第一文学部哲学科社会学専修へ入学。小学校

時代から一貫して変わらぬ、新聞記者になるための大学選

択であった。校友会機関誌「早稲田学報」のアルバイトで、

のちの講談社文芸局長大村彦次郎、芥川賞受賞作家高井

有一らと知り合う。

1957（昭和32）年･･･４月読売新聞社入社。「週刊読売」記者として採用される。ス

ポーツ、映画欄担当。

1960（昭和35）年･･･60年安保の年。「週刊読売」のトップ記事を書きまくる。当時

の全学連委員長、唐牛健太郎を知る。

1962（昭和37）年･･･秋、フジ・コンサルタント会社（ＰＲ会社）に２年間勤務。この

頃から、酒に溺れることが多くなる。

1965（昭和40）年･･･フリーのルポライターとなる。以後ＴＶドキュメンタリー構成、コ

ラム、雑誌のルポルタージュ、映画評論等の仕事に従事。

1969（昭和44）年･･･この１年間、「週刊朝日」の映画批評欄を担当執筆する。８月

１日長編ドキュメンタリー『死刑台への逃走』（立風書房刊）を

発行。処女出版である。９月３日処女作「あゝ断餌鬼」を脱

稿、「小説現代」11月号に発表。

1970（昭和45）年･･･１月末、17年ぶりに帰郷、２年４ヵ月滞在。向外瀬木伏333

の１（現弘前市城西１丁目２の８）に仮寓。

1971（昭和46）年･･･７月23日母みき死亡。享年73歳。この頃津軽書房の高橋

彰一と知り合う。

1973（昭和48）年･･･「津軽じょんから節」「津軽世去れ節」の二作が第69回直木

賞受賞。

1977（昭和52）年･･･「週刊文春」４月７日号より、「鬼が来た 棟方志功伝」を連載

開始。同書で昭和54年度芸術選奨文部大臣賞受賞。

1981（昭和56）年･･･「紙ヒコーキ通信」の連載を「オール読物」１月号より開始す

る。

1982（昭和57）年･･･12月戦死した長兄茂雄の最期の様子を確認するためフィリ

ピンのルソン島山中マヨヤオを取材する。

1986（昭和61）年･･･10月17日故石坂洋次郎の葬儀・告別式司会。

1988（昭和63）年･･･７月８日映画「夢の祭り」を岩木町で撮影開始。原作・脚本・

監督を担当する。夜、法華クラブで激励会。

1989（平成元）年･･･１月26日映画「夢の祭り」撮影終了。８月カナダのモントリオ

ール国際映画祭の「今日と明日の映画」部門に参加、好評

を受ける。

1990（平成２）年･･･１月「まだ見ぬ故郷」を毎日新聞に連載開始する。８月『長部

日出雄・津軽の本 津軽空想旅行』刊行・全６巻完結。

1991（平成３）年･･･１月10日～13日、４度目のフィリピン・マニラ訪問。「海燕」９

月号より「風の誕生」連載開始。

1992（平成４）年･･･１月新聞小説「始発駅」を陸奥新報に連載する（10月まで）。

短編集『愉快な撮影隊』（毎日新聞社）を刊行。

1993（平成５）年･･･『風の谷』（福武書店）『林檎キッドよ、永遠に』（新潮社）を刊

行。

1995（平成７）年･･･１月「歴史空想紀行」を「新潮45」に、３月「辻音楽師の唄、も

う一つの太宰治伝」を「文學界」に連載する。『二人の始発駅』

（新潮社）を刊行。

1996（平成８）年･･･「歴史空想紀行」を『天皇はどこから来たか』（新潮社）と題して

刊行。

1997（平成９）年･･･２月「反時代的教養主義のすすめ」を「新潮45」に連載開始。

４月『辻音楽師の唄、もう一つの太宰治伝』（文藝春秋）を刊

行。10月マックス･ヴェーバー取材のため、ドイツ、フランス訪

問。12月NHK人間大学「太宰治への旅」撮影開始。青森市

制百周年記念〈市民野外劇〉「青き都の物語」完成。

1998（平成10）年･･･２月「見抜かれた二十世紀　マックス･ヴェーバー物語」を「新

潮45」に連載開始。３月下旬大腸がんで入院、４月６日手

術、26日退院。８月青森市合浦公園内市営球場で〈市民野

外劇〉「青き都の物語」上演。11月「桜桃とキリスト　もう一つ

の太宰治伝」を「別冊文藝春秋」に連載開始。

1999（平成11）年･･･５月『反時代的教養主義のすすめ』（新潮社）を刊行。

2000（平成12）年･･･６月『二十世紀を見抜いた男　マックス･ヴェーバー物語』（新

潮社）と改題して刊行。

2001（平成13）年･･･７月27日から９月９日まで青森県近代文学館で「長部日出

雄展」が開催される。

2002（平成14）年･･･３月『桜桃とキリスト　もう一つの太宰治伝』（文藝春秋）を刊

行。この作品で

第29回大佛次郎賞

第15回和辻哲郎文化賞一般部門

をダブル受賞。

4月春の褒賞で紫綬褒章を受章。

2003（平成15）年･･･第56回東奥賞受賞。

2004（平成16）年･･･１月「小説新潮」新年号より隔月で「天才監督　木下惠介」連

載開始。４月『仏教と資本主義』（新潮新書）、８月『二十世紀

を見抜いた男―マックス・ヴェーバー物語―』（新潮文庫）を

刊行。

2005（平成17）年･･･10月『天才監督　木下惠介』（新潮社）を刊行。

2006（平成18）年･･･１月「小説新潮」に、「邦画の昭和史」を断続的に連載開始。

６月22日に左足の脱力を感じて、24日に通院、軽度の脳梗

塞との診断を受けて入院。７月22日退院。

2007（平成19）年･･･１月「小説新潮」の「邦画の昭和史」連載終了。５月『天皇の

誕生　映画的「古事記」』（集英社）を刊行。６月文藝春秋の

雑誌「諸君！」６月号より「作家が読む『古事記』」を連載。７

月『邦画の昭和史　スターで選ぶDVD100本』（新潮新書）を

刊行。11月映画評論の活動により、山路ふみ子文化賞を受

賞。

2008（平成20）年･･･５月『マックス・ヴェーバー物語――二十世紀を見抜いた男』

（新潮選書）を復刊。８月前年から「諸君！」に連載した「作家

が読む『古事記』」を『「古事記」の真実』（文春新書）として刊

行。９月胃がん、大腸がんの手術のため癌研有明病院に入

院。11月旭日小綬章受章。

2009（平成21）年･･･５月『富士には月見草　太宰治100の名言･名場面』（新潮文

庫）、10月『「君が代」肯定論　世界に誇れる日本美ベストテ

ン』（小学館101新書）、12月『「阿修羅像」の真実』（文春新

書）を刊行。

2010（平成22）年･･･３月右鎖骨･右足首骨折で至誠会第二病院に入院。4月昭

和55年に実業之日本社から刊行された『笑いの狩人　江戸

落語家伝』が論創社より復刊。

2011（平成23）年･･･12月「弘前城築城400年映画祭実行委員会」によってニュ

ープリント化され、面目を一新した22年前の初監督作品「夢

の祭り」が、弘前「スペース･アストロ」で上演。

2012（平成24）年･･･８月『古事記とは何か　稗田阿礼はかく語りき』（集英社文

庫）を刊行。

2013（平成25）年･･･５月『新編　天才監督　木下惠介』（論創社）を刊行。

2015（平成27）年･･･４月『棟方志功の原風景』（津軽書房）を刊行。５月『神と仏

　　　　　　　　　　　　　の再発見―カミノミクスが地方を救う』（津軽書房）、『「古事

記」の真実』（文春文庫）を刊行。

2016（平成28）年･･･２月『日本を支えた12人』（集英社文庫）を刊行。

2017（平成29）年･･･10月自宅マンション内で転倒し、右脚大腿骨を骨折。ボルト

を入れる手術後、心臓に異変（急性心不全）が生じ、転院し

て心臓の手術を受ける。

2018（平成30）年･･･２月自宅近くのリハビリ専門病院に入院。4月退院。以後、自

宅でリハビリに努める。

10月18日、虚血性心不全のため自宅にて死去。24日に葬

儀･告別式。